

子守唄内通・浜田市三隅町東大谷

令和2年12月8日掲載予定

収録・解説・酒井 董美 ただよし

イラスト・福本 隆男



https://kanbenosato.com/minwa/kancho_201103.html



語り手 竹内藤太さん（明治9年生まれ）
収録・昭和35年6月15日

あらすじ

子どもを育てるのに、りっぱな子守りを雇えば子どもが偉くなるので、学問のある子守りを雇った。

ところが、その家の親父と隣の親父が泥棒をやっており、金を持った者が泊まろうとすれば、わが家を宿に貸して、その人を殺して金を盗つていた。

一方、守をする女の子は、それが気の毒でならないと思つておりました。

ある日、だいぶ金持ちの坊さんが泊まつていた。子守の女の子は、「今夜は助けてあげよう」と、坊さんが眠らないうちに、子の尻をつねって泣かしたんだそうです。

そうすれば、子が泣くのをあやさないといけないので子守は子守歌にうたったんです。

りんかあじんと
かあじんと
とにんがもうそう

ごんすれば
たそうをせつすと
ごんすぞ
やまにやまあ かさねて
くさにくさあ かさねて
デーん デーん デーん
ところが、坊さんもりっぱな学者ですから、その歌を聞くと、すぐにその意味を悟られて、急いでその家を出てしまい、そのため坊さんは助かつたそうです。

解説

邪悪な宿屋ではあるが、雇われた子守は偉かった。悪にくみすることを潔よしとせず、わざと子どもを泣かせ子守歌をうたい、詞章で学のある僧侶に危険を悟らせたのである。この試みは見事に成功し、危ないところで僧侶は虎口を脱し、無事にそこを逃れることができた、という結果になる。

この話のおもしろさの一つは、機知に富んだ子守の歌と、それを察した僧の教養のすばらしさにあるといえよう。この歌の詞章の内容にある。つまり、漢語の持つ魅力とでもいうものだろうか。そ

れは次のようである。
りんかあじんと かあじんと
（隣家人と 家人と）
とにんがもうそう（二人が申すを） ごんすれば（言すれば）
たそうをせつすと ごんすぞ（他僧を殺すと 言すぞ）
やまにやまあ かさねて（山に山を 重ねて）
くさにくさあ かさねて（草に草を 重ねて）（草々に）
つまり「早々に」の意味）
デーん デーん デーん（出よ 出よ 出よ）
念のためにまとめると大意は以下のようになる。
隣の人とうちの主人の二人が話すのを言いますならば
よそから見えたお坊さまを殺そうと言っています（ですから、貴方は殺されないうちに、急いでここを出発なさってください）

このような次第で、僧は無事に逃げおおせたのである。関敬吾博士の『日本昔話大成』の「本格昔話」の「愚かな動物」の中に「子守唄内通」として紹介されているのである。
（元島根大学法文学部教授）